

## 重度の知的障害児の発達指標の作成に向けた調査研究

### —重度知的障害者のストレンクス視点に注目する—

○ 兵庫大学 氏名 加藤 洋子 (会員番号05411)

キーワード3つ：重度知的障害の人権・個別支援計画・発達指標

#### 1. 研究目的

障害者自立支援法の改正に基づき、利用者サービスをサービス利用計画及び、個別支援計画を作成することを義務付けられると同時に、報酬が付くようになった。

また、児童における個別支援計画策定には、発達支援を主に行うこととなっているが、知的障害者の発達指標がないため、障害児・者施設は、個別支援計画が作成できず、不安を抱えている。

健常者の発達指標に合わせるのは困難であるため、重度知的障害者の発達指標の作成を行い、2年をかけて、重度知的障害者の知的発達の段階や判断基準を明らかにしたいと考えている。

#### 2. 研究の視点および方法

先行研究等によると健常児・者の発達指標はT・G・R・バウアー等により科学的にも調査されてきた。また、発達検査等は従来から知能発達検査・性格検査・発達検査として行われてきた。近代では、認知症高齢者の介護と看護のための評価基準ということで、東京有明医療大学：看護学部・学部長である金井教授によるF. ナイチングールの『観察論』に基づくKOMI理論として、目的論：ケア（看護・介護）とは何か、対象論：ケアの対象である人間を、“生活している人間”として見つめる、疾病論：人体の構造や機能、さらに病気や症状をケアの視点で見つめる、方法論：ケアワーク展開の道筋を示す、教育論：専門職教育のあり方と方向性を解く、管理論：組織・管理のあり方と方向性を解く、研究論：実践の発展、また実践を豊かにするための研究のあり方と方向性を解くなどの総合的評価の指標が示されるようになってきている。

しかし、重度の知的障害者は、意志の読み取りも介護者の主観であったり、さもすると重度の知的障害者には意志がないように思われがちであったり、発達しないと思われたりしている状況がある。社会的に求められる発達指標の研究とともに、障害者の人権についても考える一助になればよいと考えている。

重度の知的障害者は、意志がないと誤解されることもある。本研究では、重度の知的障害者の発達指標の作成に向け研究を進めると同時に研究の結果により、重度の知的障害者が意志ある人であるということを明らかにしたいと考えている。重度の知的障害者の非言語の意志表示を体温や全身で示す意思表示のシグナルを言語化するため、介護者に観察表にチェックをしてもらい主観的なデータと反応から読み取りを行った。さらに検査結果

を分析したので報告するとともに、今後は、KJ法による質的検査と身体的シグナルは、数的調査等で実証する。

協力機関は、重症心身障害児・知的障害児施設で、対象は、健常者の発達検査で6歳以下とされているものとする。健常者の発達指標から仮の重度知的障害者の発達指標のツールと調査票を作成していきたいと考えている。介護者やソーシャルワーカーの行動変容アプローチとして個別支援計画が活用されるにあたり、非言語コミュニケーションのとり方や社会的発達支援の在り方について、今後も研究が進み障害者の希望する生活実現がかなうよう利用者理解と支援の在り方を追求したので報告する。しかし、障害者の発達指標に関する研究は計測者の主観が入り丁重に行いたいため、2年をかけて、科学的調査・検証を行いながら知的障害者の発達指標を作成したいと考えている。

現時点での分析結果を報告する。

### 3. 倫理的配慮

調査協力機関の倫理委員会にかけて同意を得たので発表する。なお、協力いただいた方の同意も得ている。日本社会福祉学会の研究倫理指針を順守し発表する。

### 4. 研究結果

健常者の発達指標では、全般的に平均的に発達していくと言われている。しかし、重度の知的障害者は、乳児前半レベルの発達の人も、運動機能面では、麻痺などの障害があり発達評価の結果は、低年齢レベルということになる。よって総合的な評価結果として知能が低く評価されているため、非常に低い発達レベルとなってしまう。しかし、発達は、乳児レベルでも、成人の支援が、乳児的扱いとしては、人権を侵害する。本研究において現時点の調査の結果、知的・言語社会レベル・情緒的反応は、成長発達していることが認められるため、障害者の状況に合わせた発達指標の必要性があると考え、そのことにより、適切な支援方法が求められることがわかったので、現時点の結果を報告する。

### 5. 考察

今後、障害者の発達指標の作成とともに、支援の質についても追及していき、行動変容アプローチとして個別支援計画がより有効的なものとなるよう、追究をしていきたいと考えている。